

田園都市の日本における理解にみる「都市の過大化」問題に関する研究*

A Study on the Understanding of 'Expansion of Cities' in Garden City in Japan

真田 純子**

By Junko SANADA

It is known that Haward proposed Garden City as the contradiction to expanding cities. But in Japan mostly Garden City has been recognized as garden suburb, so Garden City resulted in expanding cities. This paper aims to clarify the understanding of Garden City in Japanese urban planning from 1900s to the middle of 1920s. Based on the study above, the followings were found: 1) The word 'expansion of cities' was used to mean population concentration and overcrowding. 2) The discussion focused on the aspect of site planning which afford gardens, so garden suburb was accepted favorably. 3) In most of articles, agricultural belt was recognized as nature for relaxation. Consequently it can say that Garden City was understood in the context of anti-urban life by the town planning expert.

1. はじめに

(1) 背景および目的

明治になって近代都市計画が日本に移入されて以降、田園都市や衛星都市、地方計画、市域の拡大、都市の骨格をつくる意味での緑地計画⁽¹⁾などが議論・紹介され、日本における都市制度や都市の形成に影響を与えた。都市内部の都市計画制度については多くの研究がなされている。しかしながら、都市の骨格にかかわる都市計画や国土計画については、それぞれの事柄については研究がなされているものの、日本における都市計画の流れとして十分に明らかにされていない。

都市の骨格にかかわる都市計画理論の初期のものに目を向けると、田園都市を挙げることができる。田園都市が田園郊外として理解されたことはよく知られているところである。もともと大都市の否定から始まった田園都市の考えが、結果的に都市の拡大を引き起こしたといえる。田園都市について言及された当時の書籍や記事などを見てみると、都市問題として「都市の過大化」や「都市膨張」などの文言が頻繁に使用されている。それにもかかわらず、田園都市の解釈が結果的に都市の拡大を促進することとなったのはなぜなのか。日本における都市計画の流れとして田園都市の解釈を理解するためには、重要な点であると考えられる。

そこで本論文では、都市の骨格にかかわる都市計画の流れを明らかにする第一歩として、田園都市がどのよう

*keyword: 田園都市, 田園郊外, 都市の過大化, 過密
**正会員 博(工) 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部助教 (〒770-8506 徳島県徳島市南常三島町2-1)

な背景のもと、どのように解釈され、都市の拡大に結びついたのかを明らかにすることを目的とする。

(2) 既往研究

田園都市の理解に関する研究は、これまで多数発表されている。渡辺俊一は「日本的田園都市論の研究(1)¹⁾」において田園都市株式会社をとりあげ、この会社が開発したのは「ハワード流の田園都市ではなかった」とのべている。また「日本的田園都市論の研究(2)²⁾」では、内務省地方局有志による著作「田園都市」をとりあげ、これがハワードの著作ではなくセネットの著作をもとに執筆されたものであることを指摘している。

村上暁信も田園都市の日本的理解について数多くの研究を行っている。横井時敏³⁾や飯沼一省⁴⁾のハワード田園都市論の理解にかんする研究のほか、内務省地方局がハワードの“Garden City”を「田園都市」と訳した背景についての研究⁵⁾がある。これらの研究ではあくまでもハワードの田園都市論との差異を指摘することで日本的理解を明らかにしようとしているが、村上は内務省有志は田園都市という語を「泰西諸国の趨勢」をあらわす言葉として用いたものべており内務省有志が必ずしもハワードの田園都市論を理解しようとしたわけではなかったことを指摘している。

西山康雄は、戦前日本の田園都市にかんする文献を整理し、農村の疲弊対策、郊外地の開発策、住宅設計、地区設計手法として田園都市が理解されたことを指摘している⁶⁾が、どのような理解が都市の拡大を促すことになったのかについては明らかにしていない。

(3) 研究方法

本論文では、田園都市が都市計画の中でどのように

表 1 田園都市に関する言説とその内容②

年	書籍・著者など	都市問題	都市の面積の大きさについて	田園郊外の位置づけ	周囲の農地について
1907 (M40)	田園都市 内務省有志	都市膨張 ・人口密集の諸弊／不道徳、不健康 ・都市と農村人口の不均衡	普及なし	遠いを見出してない	・四周の光景と風土とをして、総べて彼等の健康と衛生とに適せしめん
1908 (M41)	都市の研究 三宅哲	・人類団集の弊害／都市の陋基矮屋に衛生なく道徳なく	普及なし	遠いを見出してない	構成として面談にのみ普及 (「田園」には触れていない)
1912 (M45)	欧米現勢細見と救済 生江孝之	病的に膨張 ・都会は病的に膨張し、村落は逐年衰頹を来す ・人口稠密／不衛生、不道徳、罪惡現象	普及なし	・此の精神を応用したもの（ハムステッド田園郊外）	・（農地内の区分画について） 時間の余裕があれば家族とともに耕作に従事することが出来る一精神上の歡樂
1913 (T2)	花園都市と都市計画 (法学新報) 岡一	大都市の膨張 ・狭き隘路ナル住居／教育、道徳、衛生上の弊害	普及なし	・田舎人口の減少を免除するに足らずとも難も密集住居の弊害の発生せる大都會例えは倫敦の如き都市に於ては花園近郊を設くるの必要大なる	配置としての説明のみ
1914 (T3)	新街建設／計画 森岡外	・閑居ノ弊	普及なし	普及なし	普及なし
1916 (T5)	現代都市之研究 片岡安	都市膨張 ・漸々衛生と風紀の上に害毒を流さん ・家屋住宅の創設	普及なし	・田園都市の経営は独立孤立するよりも、大都市近郊に於て秩序ある計画の下に発展する、所謂近郊都市計画を以て、自然的要求としてこれを推奨すべき	・田園都市の理想家は、職上階級のものをして職業の傍ら農業に親しみ、花弁を弄び、蔬菜の培養に馴らしめんとする
1919 (T8)	住宅問題と田園都市 三宅陽一	都市の膨張（肯定的に使用） ・都会の密生より来る不衛生 ・都府たるに静寂たるを究めず無秩序無成算に膨張	普及なし	遠いを見出してない (問題の中心は郊外への人口誘導)	・附属の土地より得る野菜、花卉、果物等の剰余は他に充て出すので、居住者の生活は、極めて裕福であり平和である。
1921 (T10)	英国住宅政策及都市計画 (日経経済雑誌) 岡一	都市膨張 ・計画無しに発達した都市の住居状態の弊害	普及なし	・此思想に基いた新現象（ハムステッド田園郊外） ・ボウワードの田園都市の理想は其儘には実現すること困難であるが、田園都市が田園郊外となり、都市計画となって住宅改良を促した	・市民の衛生及福利を増進する計りでなく、市内に容易く市場を求めるべき利益を有するようにより、 ・（アンウィンの言葉の引用として）田園都市にも、 及一相互間の隔離、相当の空地
1922 (T11)	都市経営論 池田宏	都市の発展膨張（肯定的に使用） ・都市生活の悲慘、住民を疎落に導く ・国民保健（死に事て効果を説明）	普及なし	・田園都市の理想を汲む興味深き郊外地区開発案	配置としての説明のみ
1923 (T12)	都市の語 弓家七郎	都市の膨張 ・汚い陋屋／犯罪の卵や結核の微菌 ・交通の混雑 ・都会の過密状態／衛生状態の悪化 ・住宅難	普及なし	・現在の都市其物も田園都市化をしなければならぬと云って田園サバーブを計画することになり…	普及なし
1923 (T12)	住宅問題と都市計画 弓家七郎	・悲惨なる密住生活 ・国民保健（死に事て効果を説明）	普及なし	・田園都市の外に、モウ一つ人口分散の方法は郊外都市である。	・田野に開かれた小都市 ・田園都市の理想は、自然との接触…
1924 (T13)	都市経営論 池田宏	都市の発展膨張（肯定的に使用） ・都市生活の悲慘、住民を疎落に導く ・国民保健（死に事て効果を説明）	普及なし	遠いを見出してない	配置としての説明のみ
1924 (T13)	田園都市に就て (都市と公園) 高橋明三郎	急激な膨張 ・恐怖の巷、修羅の都／犯罪の巷 ・集中の弊	普及なし	・此思想に基いた新現象（ハムステッド田園郊外）	配置としての説明のみ
1924 (T13)	近世都市の発展と都市計画 (都市公論) 岡一	都市の膨張 ・衛生状態 ・人口増加による都市の不経済	普及なし	・田園都市の理想を汲む興味深き郊外地区開発案	配置としての説明のみ
1924 (T13)	都市の膨張 ・衛生状態 ・人口増加による都市の不経済	普及なし	・（田園都市について）都市の大きさは工業を伴った有機体として又都市そのものが社会的活動をするのに十分の大きさを有している都市を云ふのである。	・（ガーデンシティ、ガーデンサバーブ）厳密に云ふならば…差があるものであるが、広義に解釈して宜しからう	・都市たるべき地域は田園としての特色を保つに十分なる大面積にて永久に開墾せられ… ・市街地から直に農地帯が眺められし、農夫の諷う声もほのかに聞くことを得、空舞ふ雲雀の啼る声さへ聞くことを得るのである。
1924 (T13)	近世都市の発展と都市計画 (都市公論) 岡一	都市の膨張 ・衛生状態 ・人口増加による都市の不経済	普及なし	・今日我が国の都市の郊外を開発し田園都市流の都市計画を実行して行くと云ふことは非常に重要（ハムステッド田園郊外が模範）	・（田園郊外を推奨する説明の中で）（都市が）広がるにしても今迄のやうにひら押しに広がるに一定の空地を置いて… （ただし、田園都市の農地とは結びついていない）
1924 (T13)	都市の膨張 ・都市の不平等なる密生状態 ・郊外の不自然な膨張	普及なし	普及なし	・田園都市に関連して考ふべきもの ・都市の近郊を田園都市化せしめん	普及なし

表 1 田園都市に関する言説とその内容（つづき）

年	書籍・著者など	都市問題	都市の面積的大きさについて	田園郊外の位置づけ	周囲の農地について
1925 (T14)	18 最近欧米都市の発達 橋本清之助	都市人口の膨張 ・密生生活より生ずる泥品、紛糾／非衛生的、非健康的 ・交通は殺到的光景	言及なし	・（独立の田園都市を理想としながら）大都市生活の現実の欠陥を怠いで救ふべき、前記ハムスタッド住宅地の陥穽…の実現を努力するようになつて来た ・斯かる郊外地は地価が高い	・車に之れが経済的理由のみならず、之れによつて労働の結果に伴ふ保健向上と清新なる食料品を得ることの二重利益がある。
19	田園認識と都市の田園化（地方行政） 菊池慎三	都市膨張 ・人は余りに自然を離れ過ぎた	・膨張発達の抑ふべからざるときは之を健全にして秩序的なる発達に誘導し…小都市を大都市中心として衛星の如く発達せしめ…	・田園都市衛生的都市は工場を主要なる要素とする。大都市の下宿舎を有するに過ぎない田園郊外と田園都市との差は専ら此の点に在る。	・大都市との間には田園地帯の中に挟んで連続しない様に一哩以上の幅員を有する農耕地公園等を以て永久に区別する。
20	田園都市について （地方行政） 高橋清吾	都市の膨張 ・農村人口の大都市集中 ・労働者の密住生活	言及なし	・（田園郊外は農村問題の解決にならないため、田園都市とは認めていない）田園都市的郊外住宅地はこの種の文化村であつて、…	配置としての説明のみ （「周囲」には触れていない）
21	田園都市論に見はれたる都市の理想（自治研究） 飯沼一省	過大都市 ・労働者の通勤時間が経済上浪費 ・自然を離るゝこと極めて遠い	・（田園郊外は）既に業にあまりに大きくなくなった都市をしてさらに大なしむる欠点をもつてゐる ・テナメント・ハウスには勝つてゐるかも知れない。しかし都市の中心からあまりに距離が遠い…		・（ウェリンの説明で）宅地として利用せらるゝ面積は制限せられ、その他の部分は農業地帯として永久に保留せらる。
22	都市計画の必要（都市公論） 飯沼一省	都市が膨張 ・交通量が不相当に増加／混雑	・（田園都市協会の定義を使用して）大きさに制限がある。無暗に大きくするのはいけない。	言及なし	・（田園都市協会の定義を使用）すべての都市と云ふものは農業地帯に依つて取り囲まれなければならない…他の都市とだらしなく連続してしまふというやうなことを厳重に避けるべき
23	田園都市の発達（都市公論） 重永啓	田園離去の潮流 ・都市における過密生活	言及なし	・田園郊外は既成都市をして健全なる正常的発達を為さしむるために都市計画の理想上に開発せられたるもの	・（田園都市協会の定義を使用）市街は永遠に農業地帯公園地帯を以て開発せられるべき
24	造園学概論 田村利樹	・不衛生／寿命を縮めている	言及なし	遠いを見出してない	・園芸・農作等に親しみ得るやうな田園地帯の項
25	都市政策論 田川大吉郎	・混雑、不便、不経済の極み ・不衛生の生活 ・悪臭な郊外地／天然の勝景の破壊 ・土地投機の悪弊	言及なし	・（警察費や街燈費などの経費について）郊外地のそれは、中央区域のそれに比して多くはかゝらない…これ各々が相俟ふて、郊外地の発展に、鋭意努力するに至つたゆえんだと解せられる	言及なし
26	イギリスにおける田園都市運動（都市問題） 弓家七郎	都市の膨張（官定的に使用） ・墮落の誘惑 ・密住不衛生 ・地価の高騰	・（田園都市協会の定義を使用して）大きさに一定の制限があつて無限の膨張を許さぬ	・（田園住宅地、田園郊外地などを）田園都市と称することは、田園都市論者の窺はざるどころである。 ・さあ、広義における田園都市の運動は、今や前英を風靡して居る。 ・イギリスの住宅問題は…田園都市式の理想を以て解決せられんとする	・（田園都市協会の定義を使用して）周囲を農業地帯に接して居る（衛星都市に言及し）都市相互の間は、公園又は農業地として永久に保存し…
1926 (S1)	田園都市に就て（大阪） 田川大吉郎	・人が多く集まりすぎて、不健康で、不道徳 ・投機的土地の売買	言及なし	・（田園都市と市街都市、郊外都市は区別はあるが）趣意は同じことである。	言及なし
28	田園都市の理想（造園学雑誌） 桑原家久	・人口過剰の状態 ・都市の喧騒、不衛生	言及なし	遠いを見出してない	・農業、園芸を楽しみ、又それにより収益を得んとする
1927 (S2)	29 都市計画の理論と法制 飯沼一省	都市の膨張 ・労働者の通勤時間が経済上浪費 ・自然を離るゝこと極めて遠い ・貧富の差	・（田園郊外は）既に業にあまりに大きくなくなった都市をしてさらに大なしむる欠点をもつてゐる ・テナメント・ハウスには勝つてゐるかも知れない。しかし都市の中心からあまりに距離が遠い… ・田園都市はその大きさにおいて一定の制限ある都市でなければならぬ。 ・（田園都市協会の定義を使用して）社会生活を十分に享受し得るに足る大きさを有してはかきもそれより大ならず ・（ウェリンの説明をして）倫敦から独立して、自己の力強き声明を有する自足的都市を創設せんとする	・農業地帯として永久に留保せられたる土地に囲まれたるその内部に…工場や住宅が集団をなして明瞭に維持せられるから、一つの都市的地位として自給自足の生産 ・都市の防衛 陰謀なき大都市の膨張が小都市を併呑して行く事例は決して少なくないものであるが、田園地帯は…田園都市を開闢し保護してゐるのである。	

理解されていたのかを明らかにするため、何らかの見解をもって田園都市を解説している言説を分析対象とした。つまり、都市計画に関して何らかの主張がある当時の専門家が、主張の中で田園都市を解説、紹介している言説である。そのため、欧米の記事をそのまま翻訳した記事や書物、田園都市の訪問記、同時代の理論を網羅的に扱っている教科書的な位置づけの書籍などは除外した。

用いた資料は、内務省地方局有志が「田園都市」を著わして以降、東京緑地計画の議論が開始される1927（昭和2）年までに出版された専門誌、学術図書³⁾で、このなかから上記の条件を満たす言説を抽出した。

分析にあたっては、2章で当時の専門家が何故「田園都市」を扱っていたのかを明らかにするため、何を「田園都市」として見ていたのかに着目した。その結果、必ずしもハワードの田園都市論だけではなく実際に建設された都市から田園都市を理解しようとしていたことを明らかにした。都市計画の実践（都市の状況を改善する方法）であるとして見ていたならば、田園都市の日本における理解は、当時の都市問題に大きく影響を受けていると思われる。そこで3章では、田園都市を解説する際に何を都市問題としていたのか、主に都市の膨張、過大化に着目して分析した。4章では都市の面積的拡大に関係が強いと思われる田園郊外の位置づけについて、田園都市と田園都市の違いについての記述の有無とその内容について分析した。4章までの分析において、都市の面積的拡大を否定しない言説が多いことが明らかになったが、田園都市の解説にはその構成要素である都市周囲の農地について言及しているものもある。都市周囲の農地はグリーンベルトとしても位置づけ可能で都市の面積的拡大の抑制に関係しているため、これについて5章で扱った。

なお本論文で、田園都市、と単体で用いる場合には解釈される対象としてのそれを著しており、ハワードの提唱した田園都市そのものとは必ずしも一致しない。

2. 「田園都市」解説記事の背後にある興味

当時の専門家が田園都市を解説したのはどのような興味にもとづいていたのかについて明らかにするため、何をその解説対象とし田園都市といていたのかに着目する。

内務省有志が1907（明治40）年に発表した「田園都市」（言説1。言説の番号は表1中に示された「書籍・著作など」の項の数字に対応。以下も同様）では、ハワードの田園都市論にかんする説明はごく一部で、田園都市の解説は範例として挙げられたレッチワースやボーンビル、ポートサンライトの説明によって行われている。

「花園都市ト都市計画（関、1913年）」（言説4）では、産業革命以降のヨーロッパ大都市における都市環境の悪化が、ハワードの「花園都市運動」を起こさせそれがヨーロッパに広がると共にイギリスの住居お

よび1909（明治42）年の都市計画法に結びついたという。都市計画の流れの中に田園都市を位置付けている言説は、同じく関一のその後の言説（8、13、16）でも同様であった。また、「住宅問題と田園都市（三宅、1919年）」（言説7）にはハワードの著書は登場せず、レッチワース、ポートサンライトなどの実例を挙げることで話が進められている。ハワードの理論にはほとんど触れない言説には、言説9、15、18がある。

このように、必ずしもハワードの田園都市論そのものを理解しようとするのではなく、実際に建設された都市から田園都市を理解しようとしていたものも多かった。

多くの言説で主に実際に建設された都市に興味をもたれるなか、ハワードの田園都市論がどのように位置づけられていたかについてみると、たとえば言説1では「設計企画の時代は此く如くにして一転し、すでに実行実施の時代とはなりぬ。⁷⁾」と書かれ、ハワードの田園都市論を理想を示したものと位置付け、その実施方法は実際に建設された都市から学ぶものであるとされていた。「都市の研究（三宅、1908年）」（言説2）でも、田園都市の説明にあたって、ハワードの田園都市論における田園都市の構成の後、その実行性については実際に建設された都市を用いて説明がなされている。こうした言説はその他、田園都市を解説した初期の言説（3、9、11、12）に特徴的に見られる。

以上より、当時の専門家はハワードの田園都市論を忠実に理解することよりも、良好な都市をつくる実行実績のある計画手法に興味があったことがうかがえる。

3. 都市の膨張に関する解釈

（1）都市の膨張、過大化の意味

田園都市が都市計画の手法として理解されていたならば、同時に都市問題の解決手法としても理解されていたと考えられる。したがって本章では、田園都市を語る際に何を都市問題としているのかについて着目しまとめた（表1の「都市問題」の列を参照）。言説中に都市の「膨張」あるいは「過大」という言葉が使われている場合には、それを冒頭に表記し、その後に都市問題の具体的な内容について言説から読み取れることを記載した。これを見てみると、29の言説のうち、20の言説において都市の「膨張」あるいは「過大」という言葉が用いられていることがわかる。

都市の膨張という言葉は、多くの場合において人口の都市への集中、それによる密集状態を都市の膨張、過大化を指していることがわかる。都市問題としては、密集の状態からくる不衛生、不道德、住宅難（住宅の狭さ、家賃の高騰）、交通の混雑等が都市問題とされている。

ただし、言説7、9、14のように、都市の膨張という言葉を否定的には用いていない例も見られる。これ

らは、都市の膨張という言葉都市の発展という意味で用いている。その場合でも、発展するにつれて起こってきた不衛生や地価の高騰などの個別の事象は問題としてとりあげている。そのほか、言説 1、3、20 などに見られるように、都市人口と農村人口の不均衡を都市の膨張の側面とし、都市問題としているものがある。

都市の面積的拡大を都市膨張といい、都市の問題としているものには大別して2つの傾向がみられる。ひとつは都市周縁部の無計画な市街化を問題としたものであり、もう一つは都市の大きさそのものを問題としたものである。

（2）都市の面積的拡大

上記、都市の面積的拡大に着目している言説をさらに詳しく見ていきたい。（表1「都市の面積的大きさについて」の列を参照）

1）都市周縁部の無計画な市街化

都市周縁部の無計画な市街化を問題とする言説には、言説7、13、17がある。言説7の主な主張は、都市の過密状態を緩和するためには都市が郊外に膨張していくことが必要であるというもので、その膨張は「無暗に東西南北に拡大するものではなく、一定の膨張系統のある事を忘れてはならぬ⁹⁾」という。そのために、交通機関の完備されているところに計画的に田園都市を建設していくことが重要であるとのべられている。

言説13は、田園都市の運動がその思想を受け継いで田園郊外に発展し、1909（明治42）年の英国住宅及都市計画法につながったといい、これにより「都市の周囲に拡張する区域の乱雑な発達」を防ぐことができるようになったという¹⁰⁾。言説全体を通して都市の計画的な拡張の方法であるのとらえていることがわかる。なお、田園都市の大きさに制限があることについては触れられてはいない。

言説17では、東京や大阪の郊外が「市内の不健康地の単なる延長」である「不自然な膨張」をしているという。その解決策として田園都市が解説され、そこで英国の田園都市協会は「都市の近郊を田園都市化」、つまり「都市の不幸なる密集状態を矯正し農村の荒廃を防がん」とする動きになっているという¹¹⁾。都市の近郊を適切に開発していくことが重要であるとの主張であると読み取れる。ここでも田園都市の面積的な大きさについては触れておらず、都市周縁部の無計画な市街化を問題とする言説では、都市の面積的拡大自体は問題にしていなかったといえる。

2）都市の大きさ

都市の大きさそれ自体を都市問題とする言説には、菊池慎三や飯沼一省による言説19、20、29がある。菊池は復興局計画課長、飯沼は内務事務次官で、いずれも内務省関係者であった。都市の面積的な大きさに制限を設けるべきとの主張を展開するにあたっては、

自然の欠乏を理由としている。「大都市に於ける緑の欠乏に対する救済策挽回策は都市政策の眼目であり、其の解決に依って家庭の安住と階級闘争の緩和を図ることができる。人は余りに自然を離れ過ぎた。出来る限り自然に復帰することを要する¹²⁾」という。

このような考えは言説21、29でも同様である。これらの言説では、都市が面積的に拡大すれば労働者が通勤に要する時間が長くなり、これが経済上の浪費であるというほか、「大都市には意匠といふものがない。多くは塵埃にみち、喧騒にしかつ醜悪、美観の上からいってもまた衛生上からいっても必要欠くべからざるところの自然を離るゝこと極めて遠いのである¹³⁾」と、大都市における自然との距離を問題としている。

（3）田園都市に関する言説における「都市の膨張」

ここまで、田園都市を解説する際の都市の膨張あるいは過大化という言葉の意味に着目してきた。その結果、以下の4点があきらかとなった。

- ①都市の膨張、過大化という言葉は、田園都市を解説する言説の約3分の2に見られるが、中には「発展」という意味で肯定的に用いているものもあった。
- ②都市の膨張の意味するところは、多くの場合、都市への人口集中、それによる密集状態を指すものであった。
- ③都市の膨張として面積的拡大に触れる言説もあったが、半数は都市の面積拡大自体は問題にしておらず、拡大していく部分の無計画な市街化を問題としていた。
- ④飯沼や菊池など、内務省関係者は都市の面積的な大きさを問題としていたが、その理由は通勤時間の浪費（飯沼）のほか、自然が遠くなること（飯沼、菊池）であった。

4. 田園郊外の位置づけ

都市内における密住状態や郊外の無秩序な市街化を問題とし、都市の面積的な拡大は問題にしないという傾向が、田園郊外という解決策に至ると考えるのは想像に難くない。したがって本章では実際に田園郊外がどのように位置づけられていたのかを把握するため、田園郊外と狭義の田園都市の違いにかんする解釈に着目して言説をまとめた。（表1「田園郊外の位置づけ」の列を参照）

（1）田園郊外の位置づけと役割

言説を見てみると、田園郊外に言及していない言説が2つ、実際に建設された田園郊外をとりあげ狭義の田園都市との違いについては言及しないまま田園都市として話を進めているものが6つあった。

その他は、田園郊外とハウードの田園都市論に基づく狭義の田園都市との違いを認識したうえで田園郊外を説明している。それらの多くは田園郊外を肯定的にとらえている。「（田園都市の）精神を応用したもの¹⁴⁾」、「（田園都市の）思想に基いた新現象¹⁵⁾」、「田園都市の理想を汲む興味深き郊外地区開発案¹⁶⁾」、「広義における田園都市の運動¹⁷⁾」などといい、違いは認めるものの、目指す

ところは同じであると解釈している。またその役割については「現在の都市其物も田園都市化をしなければならぬと云って田園サバブを計画することになり¹⁷⁾」や「大都市生活の現実の欠陥を急いで救ふべき、前記ハムスタッド住宅地の種類（中略）の実現を努力するようになって来た¹⁸⁾」などからわかるように、既存の都市に適用するものであるととらえられていた。これらの言説では、都市問題を人口の密集からくる不衛生や不道徳であるとみていたため、敷地にゆとりのある街の構成という側面に着目し、その実現という点で田園都市の精神を汲むものと理解していたと考えられる。

一方で、田園郊外を否定的にとらえ、田園都市とは認めていない言説には、言説19、20、21、29がある。

まず言説20をみると、この言説は農村人口が大都市に集中することを問題としているため、農村への人口定着につながらない田園郊外を否定的にみている。

都市の面積的な大きさを問題としていた飯沼の言説（言説21、29）では、田園郊外について「既に業にあまりに大きくなった都市をしてさらに大なしむる欠点をもっているのである¹⁹⁾」あるいは「都市の中心からあまりに距離が遠いために、その朝夕の往復は労働者にとりてはあまりに重い負担となるのである²⁰⁾」といい、都市の拡大を促すという側面から田園郊外を否定している。一方、同じく都市の面積的な大きさを問題としていた菊池の言説（言説19）も全体を通しては田園郊外を否定的に見る論調であるが、工場を主要な要素とする田園都市と「大都市の下宿寄宿舍²¹⁾」である田園郊外の違いを指摘するのみで、田園郊外の問題点については触れていない。

（2）田園郊外の位置づけからみる都市の大きさ

以上、田園郊外と狭義の田園都市に着目し言説を読み解いた。その結果、以下の3点が明らかとなった。

- ①約3割の言説において狭義の田園都市と田園郊外に違いを見出さないまま田園郊外も田園都市としていた。
- ②約7割の言説において、狭義の田園都市と田園郊外に違いを見出していたが、ほとんどは田園郊外を田園都市の思想を汲むものと考え既存都市に対する計画手法として肯定的に見ていた。
- ③田園郊外を否定的に見ている言説でも、都市の面積的拡大をその理由にしているのは飯沼の言説のみであった。

5. 農業地帯の位置づけ

前章までで、当時の田園都市の解説において都市の面積的拡大を否定しない言説が多いことがわかった。ところでハワードの提唱した田園都市にはその構成要素として都市周囲の農地があり、それはのちに都市の面積の大きさを制限するための永久的な農地となる。本章では、都市の面積的な大きさと関係の深いこれらの農地がどのように説明されたのかについて見ていく。（表1「周囲の農地について」の列を参照）

田園都市の説明において、都市周囲の農地がどのよう

に説明されているのかについて見てみると、言及されていない言説が5つ、田園都市の配置についての説明の中で触れているだけのものが6つで、そのうち都市の周囲であることには触れていないものが2つあった。都市周囲の農地について、その意義を説明している18の言説のうち11の言説は、自然そのものの良さを享受できること、家庭菜園などで自然と触れ合えること、農作物を売って利益を得ることができることをその意義であるとしていた。

一方で、言説19、21、22、29など都市の面積的拡大を問題としている言説においては、その大きさを制限するためのものであるとの説明がなされている。

そのほか、言説23、26では田園郊外を肯定的にとらえつつも、田園都市の説明のなかで都市の周囲は農地によって囲まれているべきであるとの文言を英国田園都市協会の定義の引用として記述しているものである。

6. まとめ

田園都市がどのような背景のもと、どのように解釈され、都市の拡大に結びついたのかを明らかにするため田園都市を何らかの見解をもってとりあげている言説をデータとし、「都市の過大化」に焦点をあてて読み解いた結果、以下の点が明らかとなった。

- 1) 田園都市の解説記事の多くでは、実際に建設された都市をその解説対象としていた。1920年代前半の言説では、英国都市計画法への反映や実際の都市建設等の「実践」に対し、ハワードの田園都市は「理想」であると位置づける解釈もあった。
 - 2) 都市計画手法として田園都市を解説する際には、必然的に都市問題に言及することとなる。田園都市を語る際に都市問題とされていた事柄の多くは「都市の過大化」や「都市の膨張」であったが、これらのほとんどは主に都市への人口集中やそれによる密集状態を指していた。
 - 3) 田園都市を構成要素である都市周囲の農地は、都市の面積的拡大を抑制する機能もあわせもつが、これにかんしては、農地の存在自体に触れないものや構成として説明するのみのものが約3分の1の言説にあったほか、多くの言説では自然の豊かさを享受できる場所、農地としての生産の場であるにとらえていた。
- 以上より、以下の通り考察した。
- ・当時の専門家は、理論としての田園都市論を習得するためではなく、すでに実践された実行力のある都市計画手法を学ぶために田園都市に着目したと考えられる。
 - ・都市への人口集中やそれによる密集状態の解決策として田園都市は受け入れられたと考えられる。
 - ・密集生活を解決する手法という意味に加え、都市周囲の農地が自然の豊かさを教授できる場所と解釈されていたことが、自然に触れ合う機会の多い郊外の低密な都市という解決策に結びついたと考察できる。このことが、田園都市が実質的に田園郊外として理解された理由と言える。

補注

- (1) ここでは、パークシステムとして計画された側面もある東京緑地計画のような緑地計画を意味している。
- (2) 本表の項目は3章～5章に対応しており、各章の冒頭で項目の説明を行っている。表中の引用文は各言説のそれぞれの項目に対応する解釈をよくあらわしているものを抜き出したものである。
- (3) 「都市計画文献目録」日本都市計画学会、「東京に関する文献目録雑誌分権編」東京市政調査会、「都市問題文献目録集成」皓星社などを参照し、田園都市（園市、花園都市なども含む）について何らかの見解をもって解説している言説を抽出した。

参考文献

- 1) 渡辺俊一、日本的田園都市論の研究(1)、都市計画論文集 No. 12、日本都市計画学会151-156、1977
- 2) 渡辺俊一、日本的田園都市論の研究(2)、都市計画論文集 No. 13、日本都市計画学会、283-288、1978
- 3) 村上暁信、横井時敬の都市農村計画とハワード「田園都市論」、ランドスケープ研究60(5)、日本造園学会、447-450、1997
- 4) 村上暁信、飯沼一省の「田園都市論」解釈に関する研究」、農村計画論文集2、農村計画学会、193-198、2000
- 5) 村上暁信、明治期の内務省地方局におけるハワード”Garden City”論の受容に関する研究、農村計画論文集1、農村計画学会、13-18、1999
- 6) 西山康雄、田園都市論と戦前日本都市計画、季刊田園都市2(1)、日本地域社会研究所、120-125、1981
- 7) 内務省有志、『田園都市』、博文館、27-57、1907
- 8) 三宅勘一、『住宅問題と田園都市』、都市事情研究会、20、1919
- 9) 関一、『住宅問題と都市計画』、弘文堂書房、260、1923
- 10) 河野誠、『都市か田園か』、松山房、71-73、1924
- 11) 菊池慎三、田園禮讃と都市の田園化、地方行政33(10)、帝國地方行政學會、416、1925
- 12) 飯沼一省、田園都市に現はれたる都市の理想、自治研究1(1)、良書普及會、92、1925
- 13) 生江孝之、『欧米視察 細民と救済』、博文館、293、1912
- 14) 関一、英国住宅政策及都市計画、国民經濟雜誌31(5)、神戸高等商業學校商業研究所、6、1921
- 15) 池田宏、『都市經營論』、都市研究会、99-100、1922
- 16) 弓家七郎、イギリスに於ける田園都市運動(三)、都市問題1(4)、東京市政調査會、92、1925
- 17) 黒谷了太郎、『山林都市』、青年都市研究会、8、1922
- 18) 橋本清之助、『最近欧米都市の發達』、新政社、168、1925
- 19) 飯沼一省、田園都市に現はれたる都市の理想、自治研究1(2)、良書普及會、75、1925
- 20) 前掲19)、79
- 21) 前掲11)、418